三弥井選書
13

伝承文学の視界

歌謡・説話
絵解をめぐる

渡邊昭五
福田　晃　編

三弥井選書
13

承文学の視界

―歌謡・説話・絵解をめぐる―

渡邊昭五
福田　晃　編

伝承文学の視界　　三弥井選書13

昭和59年10月31日　初版第1刷発行

定価2200円

編　　者　　渡辺昭五
　　福田　晃

発行者　　吉田栄治

印刷所　　第二整版印刷所

発行所　　三弥井書店
〒108 東京都港区三田3-2-6
電話03-451-9540 振替東京9-21125

© 渡辺昭五・福田　晃　1984

序

われわれが伝承文学研究会をおこし、会誌「伝承文学研究」を創刊したのは昭和三十五年であった。したがって、この会も、およそ四半世紀を経過したことになる。そして、その六人の同人も三十人となり、会員も三五〇名を擁することとなった。しかも、この間、会誌は三十の号を重ね、〈伝承文学資料集〉十冊を刊行、また『幸若舞曲研究』第一、第二、第三の三巻を上梓した。

ときあたかも、われわれの先達であり同志であられた吾郷寅之進博士の古稀を記念して、会誌三十号を編集、伝承文学研究への将来を期しつつあった。が、博士は、それを待たずして難病と対峙されつつ、昭和五十八年六月二十八日、従容として天に赴かれた。無念のうちに、われわれは相議り、先生への古稀記念号の原稿を中心とした本書〔追悼論集〕の刊行を志したのである。

およそ伝承文学研究は、狭義に解すれば、個人の創作によらずして、集団のなかにおいて自然的に発生し伝承し来たった文学の究明の謂とすべきあるが、すでに「伝承文学研究」十号の〈発刊の辞〉、および『幸若舞曲研究』の〈刊行の趣旨〉にあげるごとく、われわれはそれに留まらず、ひろく文学における伝承性を究明しようとするものである。そして、かかる研究は、国文学の世界では傍流のなかにあった。吾郷寅之進博士は、むしろ国文学の主流にあられながら、あえてわ

れわれ傍流の徒に交わられた。言うなれば、博士は、国文学の流れの此岸と彼岸とに悼さす船頭を勤められた。今日、われわれが国文学の孤児から免れ得たのは、博士らのお力に負うているのである。

右のごとく、われわれは、本書によって、故吾郷寅之進博士の追悼を企てるとともに、四半世に及んだ伝承文学研究会の歩みをふりかえりつつ、その研究の行方を占わんとするものである。

最後に、ご多忙のなか、それも早々と玉稿をお寄せいただいた各位に御礼を申し上げる次第である。

昭和五十九年六月二十八日

編者　福田　晃

渡辺昭五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

序
シュンナメジョと花ビラ……牛尾三千夫（1）
囃し田歌謡の形成（上）……友久武文（23）
「関吟集」たたら歌……真鍋昌弘（44）
幸若舞曲の和歌（その二）……岩瀬博（61）
上山宗元本「伏見常盤」……服部幸造（81）
「和田酒盛」譚の構成と展開――曽我物語から歌舞伎まで――……須田悦生（107）
近世における小町物の受容――浄瑠璃・歌舞伎作品をめぐって――……安田文吉（143）
「増賀上人行業記」の研究――成立背景と典拠とを廻って――……高橋伸幸（162）
神道集「那波八郎大明神」の一在地資料……徳田和夫（208）
神道集「児持山縁起」の成立……福田晃（223）
「玉藻前」考……美濃部重克（259）

絵解きの性格と分類……渡辺昭五（289）

シュンナメジョと花ビラ

牛尾三千夫

数年前の正月に、熊本県球磨郡湯前町公民館から、正月行事についてテレビ放送されたことがあった。この放送の中の数問を後日球磨郷土研究会の高田素次氏に手紙を送り、御教示願ったものを左に掲げて話の糸口としたい。

質問要項

問一、放送中子供達が歌っていましたモグラ追いの唄、その歌詞

答

菜園畑(サエンバタケ)のモグラ打ち
餅一丁くいやいよ（下さいよ）
粟ン餅ァいらんばい（要らないよ）
米ン餅くいやいよ

問二、モグラ追いに打つ手にもつ道具はどんなものですか

答

問三　年神や田の神の飾り方

答　年神（歳徳神）、田ノ神という名はすでにありません。幕末頃までの記録にはありましたが、すでに今は無くなっています。その飾りもいたしません。

問四　カマギに入れた種籾を床に飾ってあるように聞きましたが、この種籾はどの位の量がありますか。

答　カマギといわずカマゲといいます（叺）飾るのは「床」でなく、多くはドージ（土間入口を入ってすぐのニワ）に俵を積んであるのが普通の様です。倉のある家だけは倉の俵を一俵（現在は四斗俵、以前は三斗俵）ドージに持って来ますが、たいていの家ではドージは一種の倉庫で、俵の山がありました。現在はわざ〳〵床に俵をおく所はないでしょう。飾るのでなく、これはたゞシュンナメジョを挿す為めに使われている様なものです。

問五　又この種籾を田に蒔く、種降しの日には、どんなことをしますか。特にこの日に慎しむべきことがありますか。

例　この夜家から提灯などのあかりを出さないとか、刃物を使用しないとか、其他の禁忌があ

りますか。

答　特別にどうするという様なことはありません。この俵は必ずしも種籾という意味もないようです。シュンナメジョを挿すだけの要で、それ以上の意味はすでに忘れられています。

問六　又この籾を入れたカマギに榎木の枝を挿し、それに人形を結びつけることですが、その人形のことを「ションナメジョ」という様に聞きとれましたが、そちらの訛のまゝの正しい発音を聞かせて下さい。

答　榎木の枝には餅を小さく切ってさします。人形は「シュンナメジョ」といわれ、ネムノキ（コウカノキといふ）で作り、竹串で一本足を作ります。楮紙で着物を切ってこれに着せます。紙はつけません。着物には墨でその家の紋や、鋤や馬鍬や稲の穂をかき模様にします。

問七　人形の首は合歓の木で作る様にきゝましたが、首だけが木で他は何で作りますか。

答　笹を立て、これを麻に、青木の枝を立てゝ、これを煙草に、猫柳を立て、これを米の木と称します。ネムの木で粟の穂を作ります。アイヌのケズリバナと全く同様のものと思って下さい。それにまたネムノキで猿を作ります。これには餅を二枚かつがせます。この顔はクチナシの実で紅にそめます。

問八　その人形の数が多いと、田植の時□□□が多いと云って喜ぶとのことですが、何が多いのですか。早乙女の数が多いのですか。

答　この人形シュンナメジョはみんな俵に挿して立てます。この数が多いと、田植の加勢（早

乙女）が多いと信ぜられます。

問九　その人形は二月一日に荒神藪に納めるとのことですが、荒神藪というのは各家々にあるのですか。荒神さんと云うのはどんな神様ですか。田の神と関係がありますか。又荒神藪はどんな処にありますか。

答　荒神藪というのは、たいていは各家々にある様です。荒神さんが何の神かということはすでに忘れている様です。家の近くの一番大きな木（何んの木でもよい）の根元を「荒神さん」といって、その家々で祭っています。（この後の三問は省略する。）なお高田さんの郷里は湯前町の隣村球磨郡上村である。

備後比婆郡帝釈地方では、正月十一日に「曲木立（まげきだて）」と称して、葉の付いた槇の木を伐ってかえり、その先に綱をつけて弓様に曲げ、家の前に立て、恵方の田を三鍬打って、真中に「花びら」と称する、長さ三寸幅一寸の紙を藁の箸に挾んで年の月数の萱の穂と共に立てる。花びらは稲の花であるが、萱の穂はソウトメと称している。

又愛媛県越智郡大三島肥海で、正月十一日の地祝に、長い芒の穂を束ねて立て、それに紙のしでをつけたものを「ハナビラ」と云う。（民間伝承五ノ七）

サヲトメノキ　浜松附近の村々では正月モチの日、オニギと同じ木を多く作って、是を数本又数十木づゝ、家の前庭に幾個所も積上げる。其年約束した田植人数の数だけ積むというから、も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

う其時から五月に働く者がきまって居るのである。是を早乙女の木と謂って、十五日朝の粥をその全部に少しづゝ上げ、十八日には是を一対づゝに合せて皆竈の前に持って来て立て、もう一度粥を供えてから片付けるのである。一本でも転ぶと田植の日に転ぶと謂って大急ぎでなおし、又雨でも降ると笠をもって行って着せたものだという。（民俗一巻四号、二巻二号）

右にあげたシュンナメジョや萱の穂は、五月早乙女の田姿を象徴したものと思われる。又早乙女の木もそのような意味を持つものであろう。古くはもっと多くの初春に於ける早乙女に関する習俗があったに違いないが、いつしか田植行事の中に消え、稲の収穫の豊饒を象徴するものだけが、その正月行事の習俗として行われている。

昔は何歳になれば女は早乙女として田に出たであろうか

〻わたしゃ十三田の草始め手からもりますなぎの葉が——岡山県浅口郡田の草取唄

〻十三になればよめにやる　夏の酒　女子は長くもたれまい——神奈川県足柄下郡田植唄

初めの唄は草取唄であるが、十三を迎えると小女房とも云われ、一人前の仲間に入ったのである。

〻娘十五になりゃ、背戸に垣をなされヨー　豆の初成りゃあ、人がもぐヨー——山口県阿武郡福栄町田植唄

備後の内海よりの、殊に福山、三原地方の周辺には、どんど（神明祭）や亥の子行事の今尚さかんに行われていて注目されているが、その中でも久津の神明祭及びこの神明祭と深く結ばれている若者入りの儀式は、近年旧暦が新暦に改定されて稍簡略化されたとはいえ今も往昔の古風さを全く捨てず、行われている。

旧能地村久津部落は、同族七株あり、若者宿は世襲で、上組は島津家、下組は三次家で、この両家の隣家に各々一軒宛の娘宿がある。若者入りの儀式は昔は正月二日に行われたが、現在は一月十四日の夜、公民館で行われる。昔は十二歳で若者入りしたが現在は十五歳である。十五、六歳を小若衆、十七、八歳を爛元、十九、二十歳を中堅、二十一歳以上二十五歳までを大若い衆と呼ぶ。若者入りの規約には色々やかましい取定めがあるが、ここでは省略する。男子の若者入りと同時に女子の娘宿入りをするのもこの前後で、年齢も男子と同様十五歳であった。若者入り、娘宿入りすれば翌日から一人前の男女としての扱いを受ける資格が出来たのである。娘達の成女戒にあたる儀礼は別になかったようであるが、娘十五になると、盆衣として親達は浴衣と帯を新調して与える風習があった。盆の三日間、十四日から十五日まで、それぞれ東西の親分の門庭で、十六日夜は住吉神社の境内で盆踊りが行われた。初めは若者連中だけで踊り出し、二時間も踊って後、小若衆が娘達を迎えに行く。迎えて来るのは十五歳から十九歳までの未婚の娘ばかりで、娘の列の前後に提灯をかかげて迎えて来るのがその儀礼であった。十六日の住吉神社の境内で踊る住吉踊りの最後の夜は、未婚の乙女と深く馴れ合う絶好の夜であった。この夜契りを結んだも

のは、すぐに縁付いたという。（家船民俗資料緊急調査報告書掲載の拙稿より引用、一九七〇、広島県教育委員会刊）

久津は畠地が多く田の少い処であるが、男女とも十五歳を迎えると一人前の資格を認められた。この年から小早乙女として田植に出たのである。前掲の田植唄の通りである。

早乙女としてその年始めて田植に出るためには色々な心の準備が必要であった。

昭和十五年九月二十一日夜、出雲能義郡布部村（現広瀬町）の布部旅館に泊って、近所の森藤チョさん（六十三歳）から、早乙女の田姿について次のような話をきいた。

私の母親は早乙女の田姿と云うことをやかましく云う人でした。田姿の悪い人は縁遠いと云って、田の中に連れて入り、着物の着付から始めて、田の中での腰のかがめ方、足の開き方、苗の持ち方、手足の引き方まで、一々手をとって教えて呉れました。そして背をのして植えるようにし、手の甲から上は土の付かぬように心がけることでした。そして田植歌を上手に歌うことも大事なことで「歌わにゃ半役」と云って、歌の下手なものは馬鹿にされました。いゝ早乙女と云うのは、田姿が美しく、歌ごえがよく、そして苗の挿し方の上手な、この三拍子揃った早乙女を理想の早乙女と云いました。

昭和四十三年六月十二日、広島県高田郡高宮町原田に於いて、県指定調査のための囃子田が実演された。この日益田信枝さんの田姿は際立って美しく見えた。背丈がすらりとして色白だというだけでなく、田植着の黒地に白のかすりの処々に赤い色の柄のあるものに心引かれた。そして

白い足に赤い腰巻と黒の手甲の原色の持つ美しさは、譬えようもないものであった。それよりもまた目元の美しい人であった。ほんの心持ちそっ歯であることも却って魅力があった。俯いて苗を取っている時の襟足と田の中の脛足の白さは、女の美しきものの一つの頂点を示すものであった。そして泥田の中の早乙女の足ほど美しい足はこの世にないような気がした。

十五歳で初田植に出た小早乙女も、十七歳に達すると一人前の早乙女となったことは、備後系の田唄に多く見られる「十七ナガレ」の一聯の歌によって知ることが出来るが、他地方の田唄にも見ることが出来る。

〽十七にヨイ〳〵花かごもたせ花折りに　牡丹にあやめかきつばた——神奈川県足柄下郡田唄

〽歌え十七ほろ〳〵と　声の立つ時や若い時——千葉県印幡郡田植歌

〽十七をヨーつぼに入れて、アそばから他から、手を貸すなヨー　——和歌山県有田郡清水町押手田植唄

〽アー十よ七八がー、どーこへ田を植える——千葉県匝瑳郡田植歌

〽十八が棚へあげられて苗たもれ〳〵さいはかのとの　——三重県一志郡田植歌

〽山田のいねは畦によれかゝるよー、十七八は殿によれかゝるよ——愛媛県南宇和郡田植歌

十七八が過ぎ十九、二十になると、苗を挿す手も上達し、田姿にも色気があって美しいことは、次の「阿蘇宮の祭歌」に歌われている名吟によっても知ることが出来る。

花の世穣り　十九は　花の世盛り
十九斗りか　二十も　花の世盛り
華も散り梟り子を産バ　花も散り梟り

五月田植に先立って、一日山に登り花を折って皈る行事は未だ各地にあり、それは五月聖なる早乙女の資格を得るための成女戒の名残りと云われているが、中国地方でも出雲地方の伯耆大山の見える村々では、四月二十四日の大山祭りの日に「山アガリ」と云って、山に登って花見をした。帰りには必ず早乙女花と云って、紅いウツギの花を手折ってかえる習しであった。又岡山県久米郡久米町などでは四月四日を「花の四日」と云って、家に居ることを許されなかった。病人でも一歩でも家外に出なければならなかった。この日花見遊山をして、皈りに躑躅などの花を折って帰る習しであった。

広島県賀茂郡和木村の一万橋の西南に聳える五〇五米の一万山々頂に虚空蔵菩薩が祀れられ、五月五日の縁日にはここでも病人は背負われてでも一時野外に出なければならなかった。そしてその夜は隣村の反対側から登って来た男女と一夜歌の掛合が行われたと云う。歌垣の遺風のようなものであったのであろう。翌朝未明下山する時乙女達は赤い野躑躅の花を手折って皈り、田の畦に挿したと云われる。

折口先生の「古代研究」民俗学篇に見える、「花の話」の中に次のようなことが述べられてい

る。

「女の物忌みとして田を植える五月処女（サツトメ）を選定する行事は、卯月の中頃のある一日に「山籠り」をして行われる。そうして、山から下りる時には、躑躅の花をかざして来る。山籠りは、処女が一日山に籠って、ある資格を得て来るのが本義である。けれども、後には、此が忘れられて、山に行き、野に行きして、一日籠って来るのは、たゞの山遊び・野遊びになってしもうた。「山行き」という語は、山籠りのなごりである。こうして山籠りは、一種の春の行楽になって了うたが、昔は全村の女が村を離れて、山籠りをした。即、皐月の田植え前に、五月処女を定める為の山籠りをしたのである。

此の山籠りの皈りに、処女たちは、山の躑躅を、頭に挿頭（カザ）して来る。此が田の神に奉仕する女だと言う徴（シルシ）である。」下略

早乙女花と呼称される花には卯の花（石見）、谷うつぎ（加賀・越後）、花菖蒲（東北地方）などがあるが、この外田植期に咲く花には、栗の花・山百合・藤の花・四照花（ヤマボウシ）・橡の花・えごの花・カンボクなどがある。これらの挿頭の花はまた稲の花の象徴でもあった。

ヘ闇の夜の卯の花は雪と見たりけりやれ
山はそうに白けれど夏なれば
古歌のことばに卯の花雪じやと
何と卯の花暮れば月かと（天川本花唄）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c